

「 さ さ え 」

2010年4月発行 情報誌 第31号

発行 NPO福祉用具ネット事務局

住所:福岡県田川市伊田4395(福岡県立大学付属研究所 生涯福祉研究センター - 内)

TEL/FAX: 0947-42-2286

E-mail npo-fukusiyogunet@sage.ocn.ne.jp

HP <http://www10.ocn.ne.jp/~npofynet/enter.htm>

情報誌「ささえ」は年4回(1月・4月・7月・10月)発行しています。

印刷 よしみ工産(株) 北九州市戸畑区天神1丁目13-5

福祉用具はあなたの自立をささえます

あなたのささえがNPO福祉用具ネットを元気にします

床ずれ防止ハイブリッドエアマット「ピーウェーブ」

P-Wave



介護保険貸与対象商品

本製品は福岡県産炭地域振興センターの助成を受けて産学官で共同開発した商品です。

特長

床ずれが一番発生しやすい腰周り部分だけが膨縮するエアマットタイプ。
部分的なエアマットなので浮遊感が少なく寝心地がとてもよい。



特定非営利活動法人
NPO福祉用具ネット

「大切な芽を皆さんのやさしさに包まれながら育てていきたい…」

トリエステは精神病院を解体した

NPO 福祉用具ネット理事長 豊田謙二(熊本学園大学教授)

1980年4月、トリエステ県行政当局は、本県の「精神病院の機能を停止し、廃止する」と宣言した。トリエステは水の都ヴェネツィア東方へ約200kmに位置する人口約20万人の町である。この町で1970年代に生まれた精神病院解体の社会運動は、精神障害者とともに生きる新しいメッセージを世界に投げかけている。2001年4月、WHO 事務局長、グロ・ハーレム・ブルトランドは「豊かな国と貧しい国とにかかわらず、いまも活動しているすべての精神病院を閉鎖するように」とのメッセージを世界各国の政府機関に送ったのである。

精神病院の建設、新たに入院させること、予防・治療・リハビリは地域保健サービス、そして治療は当事者の自由意志のもとでおこなわれる。こうした原則を盛り込んだ改革は1978年公示の「180号法」であり、通称「バザーリア法」と呼ばれている。この「バザーリア」とは、トリエステ県立サン・ジョヴァンニ精神病院長として精神病院の解体を指揮した精神科医師、フランコ・バザーリアである。

バザーリアが医師としてマニコミオ(精神病院)に初めて足を踏み入れた時、「死の臭いがする巨大な解剖室」、独房は「地獄の悪臭が染みついた堆肥貯蔵室」と第一印象を書きとめている。バザーリアは1971年にトリエステの精神病院に着任し、ただちに入院患者の退院にとりかかる。71年の収容者1,182人、毎年1,300人が入れ替わりつつ、満室状態が続くのである。そのうちの90%以上が強制入院が占めていた。

精神病院は「監禁」のなかにある、とバザーリアは言う。監禁の対象とされた患者は「未来は失われ、一常に他人に左右され、1日は組織が決める時間に細かく設定され」、自己を失い、その生活が「施設症」を招くのである。別の表現では施設適応症ということができる。バザーリアの課題は二つである。一つは患者を病院から出すこと。いま一つは患者の地域での生活を援助することである。

まず、「精神病院」そのものの問題性を共通認識とすること、そのために毎日、医師・看護師・患者たちのミーティングが開かれた。患者の不平や不満が納得のいくまで語られた。こうして、「監禁」を支える人と「監禁」されている人との人間関係の転換が目指されたのである。医師・看護師・患者の垂直的関係が水平的関係に転換されたのである。

患者の地域生活には市民の理解と協力が欠かせない。患者の外出の機会を拡大し、市民との会話の接点をつくるために、院内でコンサートやパーティーを開催し、そして1973年3月には、自由のシンボルである手作りの青い「トロイの木馬」を先頭に、患者約500人とともに、職員・芸術家・ボランティア・市民が町を練り歩いたのである。閉鎖的であることを当然としてきた精神病院が、自らを開放した。それは病院解体への大いなる一歩であった。

地域での生活の支援のために、4つの地区に分けられ、それぞれに精神保健センターという拠点、1981年には精神保健局として整備される拠点が整備された。新たな入院を認めない、入院者には退院を勧める、どうしても退院できない人は「オスピテ」(=客)として院内で、入院患者と区別されて留まる。センターには24時間体制の救急精神科が置かれて、患者の不安に対応できる。1977年初期には、入院患者132人、そのうち強制入院51人、オスピテは433人まで縮小した。

院内の仕事は患者の組織する生活共同組合に委託し、患者はその仕事から報酬を得ることができる。医師と看護師の仕事は院内から地域へと重心が移される。つまり、患者の就労や住宅などへの生活支援である。

バザーリアはこう言った。「私たちにできるのは、せいぜい説得することくらいです。しかし私たちが説得できれば、それは私たちの勝利となるのです。そうです、状況は変化してきています。もう元にはもどりません」。(「ブラジル講演」1979年)精神病院の堅牢な壁を取り崩し、地域ケアサービスに転回させたのは、バザーリアたちの活動と言語なのであった。

自動採尿システム【尿吸引口ポ ヒューマニー】への期待と効果

その2 床ずれのある方への利用法

NPO福祉用具ネット 事務局 大山 美智江(看護師)



尿吸引口ポ「ヒューマニー」ってなに！

- ・ 専用の尿吸引パッドに内蔵されたセンサーが排尿を検知し、尿を瞬時に自動吸引します。タンク内にたまった尿は簡単にトイレにすることができ、つまり、オムツと吸引器が合体したものです。
- ・ 介護保険対象品ですので本体は特定福祉用具購入助成の対象品として、在宅向けは一割の自己負担で購入できます。

前回、新しい開発品「ヒューマニー」について、「びっしょり・ぐっしょり」にさせないオムツとしてまずは気軽に使ってみましょう。」と紹介しました。

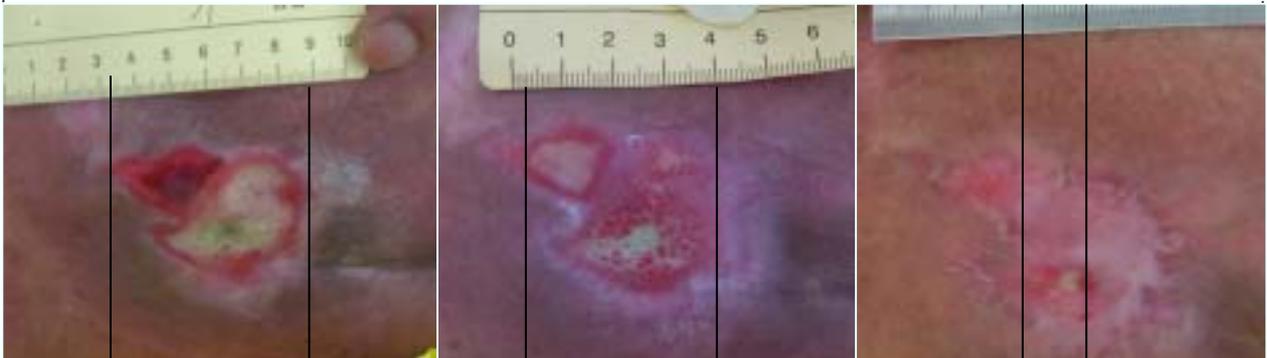
そこで、今回は本製品の尿吸引パッド部分の特徴と、モニター事例より確認できた「床ずれへの効果」について報告させていただきます。

まず「ヒューマニー」のパッドは、尿を検知するセンサーと、検知後に尿を直ちに吸い取るチューブが付いていますので、パッド内はいつも「さらさら状態」に保つことができます。この吸引機能により小さなパッドサイズでも排尿時に皮膚を濡らす部分を少なくすることができます。また、パッドのお尻側への尿の流出を少なくする「尿堰止め部分」(尾骨を保護するためのクッション付き)を作ることによって、尿が尾骨から仙骨部の方向へ流出することを最小限に食い止めることができます。これまでの吸収量に応じたパッドやオムツを使うと、皮膚の接触部分(面積)も広範囲になります。ヒューマニーのパッドの吸収部分は僅か9cm×21cm程度です。排尿方向を見極めてパッドを密着させることで床ずれへの影響を防ぐことができるということです。

これまで私は、17人の対象者に対してモニター試験を行ないました。その内、床ずれのある事例6人に対しては、ヒューマニーの「尿堰止め部分」をうまく利用することで、すべての事例において床ずれの改善効果を確認することができました。下の写真は、91歳の女性(要介護度5)の床ずれの変化の状態です。パッドの交換は1日2回朝夕に実施し、装着前のスキンケアは石鹸を用いて周辺部分まで丁寧に行ないました。創の手当では医師の指示通りに施設職員と連携して行ない、その結果僅か2～3週間程度で明らかに床ずれを改善させることができました。他の5事例も同様に床ずれの改善効果が明らかになりました。

これまでの看護経験では、仙骨部に大きな床ずれができてしまうと仕方なく留置カテーテルを挿入して、床ずれの改善を図るようにしていたこともありましたが、本製品を実際に使用してみて、床ずれの予防効果はもちろんですが、床ずれを治すための有効な一手段となり得るのではないかと考えます。

【91歳女性の床ずれの改善の写真】 カラー写真でないとはかりにくいと思いますが、



1日目 約5.5cm

10日目 約3.7cm

24日目 約1.0cm程度

足と靴の相談室 ～靴の本底を見てください～

福岡県立大学附属研究所生涯福祉研究センター 助手 中藤広美 (NPO福祉用具ネット理事)

「足と靴の相談室」をしていると「私はなぜだか靴底の外側ばかりがすり減るのですよね・・・。」という声を聞く事が増えました。靴底はすり減ります。うまい具合に踵の中心辺りからすり減っている方はなかなかいないでしょう。



大切なのは、靴底がすり減った靴をそのまま放置して履き続けない事です。なぜならばすり減った方に体重はかかり体が傾きます。写真1は、日頃私が履いている靴の右です。

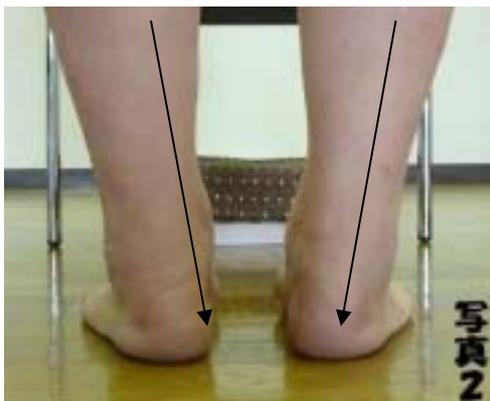
わかりますよね？外側がすり減っています。

という事は、私は着地をして踏み出す時に、外側に荷重がかかっているという事です。いわゆる外側荷重(ガイクカジユ)です。外側荷重である私の体を、靴のヒールカウンターの入った踵でしっかりとサポートしてもらい、踵が倒れないようにしてもらいます。さらに、本底がフレア(すそ広がり)になって外

側にかかった体重を支えてくれています。

この靴は本底がフレアになり裾が広がっているため安定感がありますが、そろそろ靴底の修理をしないとダメです。これ以上すり減ってしまうと、靴の持っている機能が発揮されないし、しかも足首や膝への負担が次第に出てくる事になります。

こうして記事を書いて先延ばしにしていた修理でしたが、あわてて出しました。ついでに、この靴はマジックベルトで止めるタイプですので、その部分の修理もしてもらうようにお願いしました。



さて、写真2の踵が傾いているような方が、私の靴以上に外側が減った靴を履き続けるとどうなるでしょう。考えてみましょう。

ご本人は足をまっすぐにおろして踵もまっすぐにして立っているつもりです。しかし、明らかに踵やその上に伸びていく脛骨が傾いているのがわかるでしょう。

踵が傾いているところにさらに、外側のすり減った靴を履くとその傾斜はさらに大きくなりますよね。

すると、踵や脛骨の傾き角度はさらに大きくなります。脛骨の先に膝や腰があります。膝などへの負担が増し故障の原因となるのがなんとなく想像できるのではないのでしょうか。

靴って大切です。

なんだか最近、膝の調子がおかしいとか歩きづらいつ感じている方は、靴の本底のチェックをしてみましょう。

皆さんの靴の本底はすり減っていませんか？すり減っていたら修繕や履き換えの検討をしましょう。

今、思うこと。「福祉用具の開発に王道なし」

(その21)

九州日立マクセル(株)開発本部長 坂田 栄二
(NPO福祉用具ネット理事)

チャレンジャー「かえりやま」に任せよう

車いす用体重計のデザインは決まった。

さて、設計は誰に頼んだら良いか？設計をするには、その機能を理解し、壊れ難く、しかもコストを考え安全性を保てる構造にしなければならない。

残念なことに、この会社は今までイスの類(たぐい)の設計を誰も経験したことがない。先に訪問した大阪の体重計メーカーでもイスの設計は経験がないとの事。またこの計画は行き詰った。

皆で悩んでいるところに、松原がやってきた。状況を聞くなり彼は、

「そりゃ・・・、帰山(かえりやま)にしか出来んぞ。」

と、ある設計者の名前を挙げた。

そうだ、帰山が居たではないか。皆は妙に納得した。帰山は、ハートの熱い男である。彼は、洗濯機の設計から始まり、ヘアードライヤー、犬や猫の毛並みを整えるペットグッズなど分野の違う色んな商品の設計を手がけてきたことは皆もよく知っている。他の人が出来ない設計、まったく新しい商品設計など任せられれば果敢にチャレンジする。

ペットグッズの開発では、軟らかい手袋に硬い毛ブラシを接着できる新しい接着技術から開発したり、仕上がった試作のペットブラシを試すのに、工場の前をうろついていた野良犬を捕まえてきて試すなど、人の思いつかないことを平気でやってのける。それでもって商品まで仕上げていくという恐るべきパワーの持ち主である。

坂田は早速、帰山を開発仲間に入れるために呼び出した。目的の商品の内容を聞き終えた帰山は、

「こんな難しいものを俺に作れと言うかよー！」

と言った。これは彼の口癖である。彼はこれまでの経験から、この商品がどれだけ難しいものであるかを直感的に感じ取っていた。しかし、この口癖が出るということは彼のチャレンジ魂に火が点いたことを表している。坂田は長年の付き合いからこのことを察知し、安心した。

「お前やったら出来るよ！」

「おだてても、でけんもんはでけん。」(出来ない)

「まあ、そう言うなよ。この商品を欲しがっている人はこの世の中にたくさん居るんだから。皆が喜ぶぞ。」

帰山は、坂田のこの奇妙な説得の言葉を聞き流しながら、いつの間にか、デザイン図を取り出し寸法をチェックし始めていた。やはり、彼の闘争心に火が点いていたのだ。

帰山は、机の上に重なって散乱している図面や写真を片付けて小脇に抱え、

「ちょっと、考えてみるワ。」

と部屋を出て行った。

「やっぱりやる気だぞ。」

あっけない結末に居合わせた皆は、拍子抜けした。

情報が問題を解決

それから3日後のことだった。

「皆、集まってくれ。」

帰山が関係者を呼び集めた。

「このイスはパイプフレームが作りやすい。俺の知っている人が、台湾のイスメーカーと付き合っているから、その人から台湾のイスの様子を聞いた。体重計は検定証を付けないのなら、台湾製でも行けるぞ。」

そこで、明日から台湾に行つてこようと思っている。台湾で打ち合わせてくるよ。」

出席者は、彼のあまりの手回しの良さにただ驚くだけ。わずか3日で計画立案していた。彼のネットワークの使い方は見事なもの。だからこそ、どんな難問でも片付けてしまうのだろう。

彼は3日ほどで帰国してきた。お土産は大きなダンボール箱。その中味は、何と車いす用体重計だった。パーツに分解されて梱包されていた。それを組み立てると本格的な体重計だった。台湾では既に商品化されていたのだ。

「でも、これは値段が高いし、大きくて使いにくい。とても日本では売れない。」

彼はその体重計に腰掛けながら、その問題点を鋭く指摘していた。

「だから俺は、もっとコンパクトで安くなるように打ち合わせて来た。今、台湾で試作してもらっているから楽しみに待っててくれ。」

デザイン優先の弊害は「足弱」だった

1ヶ月が経った。台湾から試作品が届いた。帰山は台車にダンボールを乗せて会議室まで運んできた。

「届いたぞ。組み立ててみるか？」

そう言いながら、段ボール箱のガムテープを威勢よく剥ぎ取った。周りの者も箱の中からスポンジに包まれたパーツを取り出し、帰山が組み立てやすいように並べていた。帰山はただひたすらにネジを回して組み立てている。

「出来たぞ！！。」

自信有り気に大声を上げた。そして真っ先に腰掛けた。

メーターに数字が出た。彼の体重である。やや太り気味か？この体重計はちゃんと動いている。彼は安心したかのように深くと座りなおした。

そのとき、設計者の一人が、

「何で、なんにも色が塗っていないのか？」と彼に聞いた。パイプや体重計カバーは鉄材の素地色のままだったからだ。

彼は、良くぞ聞いてくれたとばかり、「うちのデザイナーに実物を見て、色を決めてもら



いたかったからね。これならデザイナーが好きに色を決めれるじゃないか。」

「それじゃ、錆びないうちにデザイナーに色を決めてもらおう。」

見通しが立ったことで、わいわいと盛り上がっている皆の中に、

空気が読めない帰山がいた。

「どうしたん？」(どうしたの)

との大山の問いに無然として、

「さっきから座面がぐらついているんだ。どうもイスの足の強度が弱くて、変形しているんじゃないかな…」と足元を覗き込んだ。

「おっ、足が傾いているぞ。足が貧弱で俺の体重が支えきれないみたいだ。」

「足を補強するしかないな…」

「でもデザイナーの考えを聞いてみないと、不恰好な形になるぞ、

「デザイナーに来て、修正してもらおう。」

皆は、口々に言いたいことを言っている。

このままじゃまとまりが付かないと思った坂田は東京のデザイナーに九州まで来てくれるよう電話で頼んだ。デザイナーが都合を付けてきてくれるまで5日かかることになった。

帰山の面目

その間、皆は座って試してみたいばかりだが、壊れると困るので、足の両サイドに添え木を当てた。

おそろおそろ交替で載り、

「ちゃんと計れるじゃないか。さすが帰山！」

腕組して横に立っていた帰山は、にんまりとして、

「そりゃそうたい、頑張ったもんね。」

と体重計を撫でた。それは帰山の面目が保てた一瞬であった。あの図面を始めてみたときの困惑しきった悲壮感はまったく感じられなかった。

一体、何台売れるのか？

そのとき、開発室の前を通りかかった社長が部屋を覗き込むなり、体重計を見つけて、

「ほう…立派なものが出来たじゃないか！私も座ってみて良いか？」

帰山は、座りかけた社長のお尻をあわてて前へ押し返しなが

ら、「ダメですよ。まだネジも完全に締めてないし…壊れますよ。」

と止めた。

社長はやや小太りで体重は90kg以上の雰囲気だ。このイス足の弱いままで重すぎる体重をかけたら、一気に変形してしまう。帰山は、社長の気をそらすように、操作方法を説明し始めた。しかし座りたい社長は食い下がってくる。

「何キロの人まで計れるんだ？」

「120キロまでです。」

「それじゃ、私も計れるな？」

どうしても計りたい社長は、イスを手で揺すって、

「もう少し強度が必要かな。足腰が弱いな」

と見抜いてしまった。社長は元機械設計者である。

観念した帰山は、

「ええ、それで足の部分にデザインの的に補強を入れようと思っています。」

「そうだな。座る人に、見た目で安心感を持ってもらえるからな。」

社長のその言葉に帰山は、救われた。

しかし事件はその次に起きた。

「ところで、一体、何台売れるんだい？」

この場で予期せぬ爆弾質問だった。経営者になれば当然の質問である。多額の投資をするのだから、経営に影響が出るのを心配するのも当然である

ここまで進めてきた大山も坂田も返答に困った。用意しておくべき回答なのに、ものづくりが心配で十分調査が終わっていなかったからだ。もし体重計が出来なかったらどうしようとばかり悩んできて、手が回っていなかった。

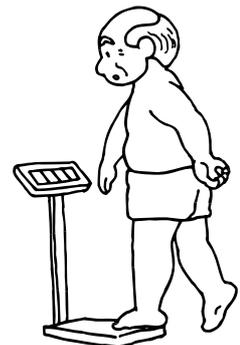
大山は、

「佐賀大学の松尾先生に相談しています。先生は色んなルートを知っているから、どれだけ売れる見込みがあるか分かると思いますけど…」

語尾に近づくにつれ、大山の声は小さくなった。自信のなさが良くわかる。社長はそれ以上深く追及をしなかった。

「いいデザインに仕上げ、たくさん売れるようにしなさいよ。」そういい残して部屋を出て行った。

(つづく)



心ひかれた福祉用具 マイチョイス

(シリーズ 10)

NPO 福祉用具ネット会員 (理学療法士)

井内 陽三

ターミナル・ケアでの関わり

最近、ターミナル・ケア(終末期医療)という言葉をよく聞くようになりました。通常の仕事でも、そのように診断されている人に関わる事が出てきています。そんな中、自身の親戚が、ターミナル・ケアを受けることになり、関わりを持たせてもらうことができました。その時のことをお話ししたいと思います。

体調を崩して病院に検査に行った親戚 A 子は、そこで内臓の病気と診断され、手術も受けました。しかし、その後の状態は思わしくなく、起き上がるのも大変な状態になりました。本人の希望は、「家に帰りたい」のただひとつ。家族は仕事の都合で不在のことが多く、日中独居であるため、誰もがそれは無理ではないかと思っていました。本人の希望が強いため、以前から関わってもらっているケアマネージャーに相談。常時、ヘルパー介入と、近隣の通所サービスなどを利用することで、念願の帰宅を果たすことができました。

帰宅できたので、お見舞いを兼ねて様子を見に行くと、「寝てばかりいると腰が痛いので、座りたい」との訴え。本人は、円背があったため、いつも軽くベッドの背中をギャジアップして寝ている状態でした。円背を持つ人が快適に座るには、背中の丸さや骨盤の傾きに合わせた調整が欠かせず、なおかつ今回は、本人は座る安定が悪いので支えを多くしないといけない。ここで、車いすを見ると、モジュール型の車いすをレンタルしていました。私は思わず「良かったー」。背中や足の位置を調整し、クッションも空気式で調整可能。そこに座ると、「あー、座るといいね」と、にっこり笑顔。30分ぐらいいして、「もう寝らんね？」(ベッドに戻って寝ない?)。「いやもう少し、このままがいい」。もう一度、「もう寝らんね?」。1時間程度座ったあと、ようやくベッドへ。「寝ると腰がいたいけね〜…」と渋い顔。

その後、数週間は、在宅サービスの支援を受けて自宅で生活できました。しかし、身体の状態が悪化し、入院。知らせを受けてすぐに病院にかけつけると、酸素吸入、心電図など多くの機械をつけていて、「あー…、ウ〜…」と眉間にしわをよせた表情。「ピーピーピピ」と頻りに鳴る機械のアラーム。時折、両手を空中に突き出し、空気をつかむようなしぐさ。徐々に話ができなくなり、苦痛はひどくなっている様子だと、本人の息子や親戚などから聞かされました。また、唸るような苦しみが続いたため、医師に痛みを和らげるように薬を入れてもらい、また、昨夜は一晩中、交代で身体を擦っていたとのことだった。この時点では、みんなお腹が痛いと思いついていたようでした。しかし、ここで私は冷静

になり、「内臓に神経はないので、そんなに急に痛みはでないはずだが…」と思い、ふと、足元に目を向けると踵部分が真赤になっていた。「これか!」。早速、枕を身体に入れポジショニングと体位交換し、背中をさする。見る見る間に呼吸が落ち着き、唸るような声はなくなり、「スースー。ピピピ…」と寝息と機械音だけが病室に響くようになった。病院のベッドでは、除圧効果の高いマットを使用していたが、寝返りや体動ができないため、除圧ができていないことが痛みの原因だったのです。空中をつかむような動作も、自身が動く部分を使った除圧の動作だったのです。付き添いをする親戚に1~2時間程度での体位交換とクッションの差し替えを説明。

数日後、穏やかな顔の伯母を病院のベッドで見送ることができました。

本当の終末の場面に立ち会うことは、今まで経験がなかったのですが、今回のことで、ターミナル・ケアのひとつとして、環境設定でも何かしてあげられることはあるのだと感じました。特に終末だから医療処置ですべて終わりと言うことではなく、本人の思いや、通常の在宅生活を充実したものにする「生活の質」の問題。終末期にベッドで臥床している人でも、最後の最後まで生活している方々に対するのと同じような感覚で冷静に見つめ、積極的に行動することの重要性も知りました。

葬儀の夜、親戚数名と昔話と、思い出、それと病院での最後の数日の話をしました。

「最後は楽になったみたいで良かったな〜」

「あげなふうに苦しんどっても、どうしたらいいかわからんもんね」。

「あの買ってきた枕、かわいかったな」(病室のベットは寂しげだったので、私が、茶色の犬の枕を途中で買ってきていた)。

「そういえば、お母さんはピンクが本当に好きで、紅白饅頭でもピンクを選んでたね」と、息子。

「それやったら、あんまり派手すぎやろと思って買わなかった、ピンクのウサギの枕の方がよかったかねー」。

みんなで、少し笑えた。

(最後に)

文書の兼ね合いで、全部を語ることはできていませんが、今回、本当に親身になって長く自宅生活を支えてくださったケアマネージャー様。気持ちよく生活支援をしていただいたヘルパーステーションのスタッフの皆様。難しい状態でも受け入れてくださったデイケアのスタッフの皆様。入院中、手を尽くし、また優しい声掛けをしていただいた病院職員の方々。皆様にこの場をお借りして御礼申し上げます。

事務局からの報告

平成21年度も無事に終え、いよいよ新しい年度を迎えます。気持ちを切り替えて頑張らなければならないところだと思います。新しい年度に向けて、皆様のより一層のご協力をよろしくお願い致します。(事務局 大山)

平成22年1月から3月までの事務局の動き

開発品臨床試験に関する受託事業

(平成22年1月～3月)

その他、2件の開発相談のために会議などに出席。

平成22年3月12日福祉住環境コーディネーター協会委託事業、総合せき損センター様の施設見学

開発協力品、ヒューマニーに関する製品説明や取り扱いについて助言(現地訪問や事務局にて)

理事会開催

3月24日18時から年度末の理事会を開催。

決算や事業のまとめに関する事務作業

平成22年度通常総会開催のご案内

日時: 平成22年5月12日水曜日18時から

場所: 福岡県立大学内

議題: 平成21年度事業報告及び決算報告

平成22年度事業計画案と予算案

任期満了に伴う役員の変更

その他

平成22年度福祉用具研究会会員募集

今年も5月から11月まで、月1回の合計7回シリーズで福祉用具研究会を開催します。今年のテーマを「車椅子と姿勢」について考えてみたいと思います。皆さんも一緒に討論しませんか?

勉強したい方は是非お申込み下さい。所定の申込用紙があります。

申込締切: 4月末まで。

申し込みをされた方には、後日、研究会の開催日程をお知らせいたします。

詳細は事務局大山までお問合せ下さい。

オムツフッター3級研修会のご案内

九州地区で始めて開催します!

京都むつき庵との共催事業として実施します。

オムツフッターの研修会は、これまで京都や東京でしか開催されていません。九州で開催される貴重な機会です。この機会にオムツの当て方について真剣に勉強しませんか?

日時: 平成22年9月17日～18日(2日間)

場所: 福岡県立大学内

受講費用: 1人 20,000円

申込締切: 第1次締切 6月末

募集人数: 40名(NPO福祉用具ネット会員優先)

詳細は事務局大山までお問合せ下さい。

決定している事業

福祉住環境コーディネーター協会主催見学会

・4月24日大分県社会福祉介護研修センター

・5月10日(株)有菌製作所

・6月26日山口夢のみずうみ村

申込先は福祉住環境コーディネーター協会へ

詳しくは、福祉住環境コーディネーター協会ホームページをご覧ください。

平成22年度新会員募集

新年度の会員を募集しています。

個人会員入会金 1,000円 年会費 4,000円

団体会員入会金 2,000円 年会費 30,000円

賛助会員 1口 3,000円以上から

ホームページから申し込み用紙がダウンロードできます。

また、平成21年度の会員の皆様で、継続手続きをされていない方は4月末までに手続きをお願いいたします。

小坂副理事長の訃報のお知らせ

副理事長として、長年NPOを支えていただいていた小坂和英氏が今年の1月14日に病気のため亡くなりました。小坂氏は一級建築設計士であり、建築家のプロとしてバリアフリーの調査や高齢者や障害者の住宅改修に関する相談などに対して事務局を全面的にサポートしてくれていました。心より感謝しています。

また、先日、奥様より、NPO福祉用具ネットに寄附をいただきました。重ねて御礼を申し上げます。

尚、小坂副理事長がターミナルの時期に使った福祉用具は電動ベッド3モーター・床ずれ防止用具の「P・Wave」やウレタンで手づくりした大小のクッション、体位変換用クッションの「スネーククッション」は最期の身体の苦痛を和らげることができたと奥様から感謝されました。また、入浴の際に浴槽に座ると痩せたために骨が突出しお尻が痛いとのことでしたのでゲル状のクッションを紹介しました。浴槽内に沈めてその上に座って入浴されることでゆっくりと浴槽に浸かることができました。術後には、ギャジアップ時に枕がずり落ちることを防ぐための「枕オチナイス」という製品も紹介しましたが有効だったと伺いました。パシーマ製品のシーツ類も大変心地良かったとの事でした。福祉用具が小坂副理事長の最期の苦痛の緩和のために少しでも役立ったことをとても嬉しく思いました。

小坂副理事長のご冥福を心よりお祈りいたします。

(事務局 大山)